

## 親鸞門下の一教學

松野純孝

惠信尼消息で信蓮房が五條殿のために野積の山寺で不斷念佛をはじめてゐることが知られる。これは「父母孝養のための念佛申さず」とか「某閉眼せば賀茂河に入れて魚に與うべし」という歎異抄や改邪鈔の編者からみれば親鸞の正義を逸脱したものといわれるだろう。成程信蓮房の行業は法然に歸依する前の比叡の山での堂僧親鸞のそれであり、従つて彼の念佛は再び山にかえつた如き印象を與える。ところで惠信は三部經千部讀誦の迷妄を止めて念佛の信心に轉入した親鸞の寛喜内省を傳えているから、彼女の念佛はまさに親鸞の正統を承けていると思われる。その正信の念佛者惠信が信蓮房のかかる念佛行を別段止めることもなく記述しているところからみると、惠信にはかかる不斷念佛は廢捨さるべきものでなく正義の念佛と融消して理解されていたのだろう。そして親鸞との同居時代にもかかる不斷念佛が處々に營まれていて親鸞もこれを異としていなかったからにちがいない。指南抄の鎌倉二位禪尼への書に、人々の堂や佛を作り經をかき僧供養せむことは「こころみだれずして慈悲」をおこすから、かかる雜善根をすすめよといひ、又「このよのいのりに念佛のこころをしらずして佛神にも申、經おもかき堂おもつくらむと、これもさきの如く候べし」といつてすすめたり、更に十一箇條問答では決定信獲得のうえでの他の善根に結縁助成することは

雜行とならなくて却て「わが往生の助業」とさえ斷じて、余佛余經について善根を修せむ人に結縁助成することを積極的に支持していることを重視したい。親鸞も法然のかような助業觀に感應していたがためにかく記録したに相違あるまい。そこで選擇本願の立場が教團の擴充開展に際會しては、從來の如く一本調子に助業を廢棄するという割りきつた面からのみ考究されるのでは片手落で、寧ろかかる諸行的要素を如何に攝取し融會していつたかを研究する必要がある。この意味では法然門下の教學がこの諸行の扱いに腐心し分流していつたことは（安井氏、法然聖人門下の教學、參照）、それだけ教團人とのかわりが濃密になつたことであり、法然淨土教がよりコンパクトなものになつた一面がみられないだろうか。かような視點から親鸞の宗教の核心を究明する一の試みとして、彼の對機たる門下の教學の根本的立場を考察し、その命題が教團人の欲求といかなる關連において形成されていつたかをみよう。

「眞宗の聞書」をかつて親鸞に「すこしもこれに申して候やうにたがはず候へば、うれしう候」といわれた性信が建長年間の鎌倉念佛停止に朝家國民のための念佛に言及して陳狀している。親鸞はこの性信の念佛を「めでたふ候べし」といふが、その意は朝家國民のために念佛するというよりは、正しい念佛のあるところにおのずか

ら世の安穩が將來されるものだから、それにつけても正信の念佛を弘めなければならぬというので、基調は信の念佛である（拙稿、中外日報、昭二六、九、二二）。親鸞がかく報恩の念佛を強調して「このほかは別の御はからひあるべしとはおぼえず候」と性信にだめをおしているから、性信の陳狀は別のはからひあり、余の人を強縁とする念佛に陥る危険性をもつていたのではないか。これより後の消息だが、性信には大番役の人達がいたことが知られる。とも角、性信が念佛斷壓を機會として朝家國民という如き護國的な社會的關心を念佛にもちこんできたことに注意したい。この性信の特異な發言を親鸞も亦許容しているのである。

血脈文集は法然、親鸞、性信の三代傳持の血脈を示したもので、うが、その中に善鸞義絶に關する性信宛消息が收められている。つまり親鸞の正系をつぐものとして善鸞との關係が斷たれていることを明示する要があつたのだろう。従つて善鸞の立場に對して性信系の根本的立場が今集に闡明されているといえよう。所收消息の思想は正嘉元年十月十日付性信宛のものに つまるよう、攝取不捨、正定聚不退、彌勒等同、無義爲義佛智不思議（諸佛等同の思想が即同佛の邪義にならないために、この思想を並記しているから、これも諸佛等同に關連して考えられる）等の如く結局「信心の人は如來と等し」の高调にあるようである。そしてこれら一連の消息が念佛停止にからむ建長八年の善鸞義絶年時に前後している事實（消息全體の年時推定は別に發表豫定）は、今集の思想的立場が善鸞の立場と對していることを裏書するものであらう。善鸞に對して信の人は如來と等しという破天荒の旗幟を明かにしたものだといえよう。性信と同じく善鸞に對される眞佛（十一月九日付慈信宛消息に眞佛坊、性

信坊とある。筆頭に眞佛とあれば、彼の關東教團における地位がわかる）をみるに、眞佛宛正嘉元年十月十日付の消息内容はさきの性信宛のものと同趣だから、眞佛の思想も性信と同一立場に基いていたことが推測される。眞佛作とされる經釋文聞書（高田學報九）にもこれと同意の經文が記されている。この書の製作時は不明だが、はじめに善導法事讃の「五濁増時多疑謗」の文がある。この文は所謂獅子身中の虫の喩として念佛斷壓に關してよく消息に引用されているから、この書も鎌倉念佛停止と連關して考えられ、眞佛は正嘉二年没だから彼のごく晩年の作とみて、彼の思想のゆきついた最高が述べられているとみてよいのではないか。この書に一念一聲の南無阿彌陀佛を教行證言としてあるのは特に留意されるが、又華嚴經言として信爲道元……の經文の文意が書寫されている。聞書中經文の解釋が付されているのはこの箇所だけで、それだけ格別にこの經文が眞佛に感ばいされていたのだろう。ここに成佛に信心の必要不可欠を述べこのよろずの功德の母たる信心に「一切のよろ／＼の善根おも修し三寶おも恭敬し供養することをやしなひててうたかひのこゝろおはなかくのそき」无上道涅槃をさと（自利）、このさとりを得れば即ち衆生を利益する（利他）とある。即ち獲信して諸善根等を修することがいよいよ疑心を除いて信を堅固にするというわけで、これははじめに引用した指南抄の立場と同じといえよう。眞佛は更に業報差別經言として音聲念佛讀經に十種功德をあげ、その中で諸佛歡喜、三昧現前の功德を記しているのは興味深い。そして觀佛三昧經によつて念佛の威力で日日夜夜念念歩の所犯極重惡が皆消滅し命終決定生極樂として念佛の功德を力説している。眞佛は高田教團というよりは寧ろ全東國教團の棟梁格ともい

べき地位の人で、教團の發展に心を砕いたろうから、民衆の勸進に當つての苦心の程がこのような彼のくだけた思想にみられないだらうか。親鸞も法然の廿五日の御念佛も詮ずるところ邪見のものをたすけんれうにこそといつてゐるから、かかる念佛を通じて教化結縁に努めていたことがわかる。次に眞佛をうけた顯智をみよう。彼は徳治三年に五卷書を集記している（宮崎博士、眞宗書誌學の研究）。これはこの標目でもわかるように血脈文集の思想と同じといえよう。ただ善鸞義絶に關する消息がないが顯智はこの書の三年前に義絶狀を書寫してゐるから、彼の思想的承譜も血脈文集と同列において差支えあるまい。五卷書集記の翌年（歿年の前年）彼は淨土の文類を集記して専空に授與してゐる（高田學報十一）。これも眞佛聞書と同様、彼の立場の最後の表出と考えられるが、戒律について相當のスペースを費し、眞佛の三昧現前の念佛に對して彼は念佛三昧の語を屢々使つてゐる。この書が特に首楞嚴經や、續選擇文義要鈔によつて智證釋云、大目經疏釋深秘阿闍梨云として密教の釋義を引證してゐるのは淨土門の註疏としては珍しい編集といふべきだらう。首楞嚴經の「我本因地以念佛心入无生忍」の无生忍は正嘉二年の廣本銘文ではフタイノクラキナリとあるから、この文は現生不退如來等同の思想と密接してゐるといふよう（淨土和讃ではこの經文が源空の本地と關連してゐることは注意すべきである）。續選擇は禪林寺靜遍作で密教的色彩が濃く「以眞言菩提心相應于念佛三昧當宗與秘宗教門雖異其旨自一」とまでいつてゐる。續選擇を傳持した顯智が（山田氏解説）念佛戒行というべく、この集記に律部の抄文を相當に引き、念佛三昧の語を使つたり、永觀の如く阿字觀を引用してゐるから、彼の思想が眞言の立場と接近してゐることは見逃せ

ない。彼の自筆書寫本淨土和讃卷尾の別和讃中「無明法性ことなれと、心はすなはち一なり、この心すなはち涅槃なり、この心すなわち如來なり。罪業もとより所有なし、妄想顛倒よりおこる、心性みなもとときよければ、衆生すなわち佛なり」（生桑氏、高田學報十二）の思想は淨土思想としては注意すべきで後の「我心佛也……是即身成佛也」（山田氏、無盡燈十八ノ六）の思想と對照して考えたい。又彼が四天王寺（念佛）——聖德太子——と往來があつたようであることも注意される（生桑氏、高田學報十二）。善性本御消息集も顯智の所傳といわれるが、今集の思想も血脈文集や五卷書の如く信の人の如來等同を高調したものである。今集の終に康元二年の夢告讃等二首がのせてあるのは、今集の内容が特に正末和讃と深いつながりのあることを示すものか。そして正末和讃は善鸞事件の頃選述されてゐるから、善鸞に對する眞佛、性信、顯智等の教學はこの和讃との連關において考察する要があらう。善性本には門弟の上書が付されてゐるから彼等の思想を知る上に得難い資料で、これらでみると彼等の關心は専ら獲信後の如來等同の得益にのみ拂われていたことがうかがわれる。蓮位書狀に「またのぼりて候し人々、くに論じ申すて、あるいは彌勒と等しと申し候人々候よしを申し候しかば」とあるから教團人には彌勒と等しということが余程の關心事であつたのである。蓮位は彌勒の妙覺のさとりは「五十六億七千萬歳のあかつきを期」すのに對して、信心決定のこれは「ちくまくをへだつるほどなり」といつて信心他力の人が彌勒自力の人よりも優位さえしてゐるといつてゐる。蓮位がこの書狀を讀みあげて親鸞に「めでたく候」といわれてゐるから、親鸞もこの蓮位の考え方に賛同してゐたわけである。御消息集や末燈鈔の年時推定の私見からい

えば善鸞事件を分岐點として、事件落着前は一念多念、有念无念、造惡無碍等、唯信抄、一念多念分別事、后世物語等を基調とする信心そのものが中心問題であつたが、落着后はその中心が信決定后の現益に移つたようである。親鸞が善鸞の法門によつて關東の念佛者が心をかえ、「ちからをつくしてかずあまたかきてまいらせ」た唯信抄、自力他力文、后世物語開書、一念多念證文、唯信抄文意、一念多念文意等がみな捨てられ、「みな詮なくなりて候なり」と悲嘆しているのは、これら信心に關する法門が究極はともあれ、當面善鸞の法門にかなわなかつたことを物語ろう。善鸞の法門はおほぶの中太郎門下の九十余人どころか常陸、下野の念佛者の心をみなかわらせたと傳えられる程民衆の心を掴んでいたわけで、その傳播力に比べては第十八の本願はまさにしほめる花の如き存在であつたのだろう。善鸞の法門については更めて考究するが（三品博士―佛教史學二ノ四―の新見解は注目される）、大谷系の末燈鈔に全く義絶に關するものが収めてないばかりか、善鸞の立場を例えば書寫山性空の如く邪見の群衆を誘引するための大聖の善巧とする（敬重繪詞）のは單なる善鸞の辯護とのみ片付けられないようである。

親鸞は建長八年以後唯信鈔文意や一念多念文意を書いているが、その原本たる唯信抄等を書寫していないようである（宮崎博士、前掲書）。つまり親鸞獨持の文意が必須になつたわけで門弟達は唯信抄等だけでは満たされなくなつたからであらう。文意で強調されているものは唯信抄等に鮮明にされてない正定聚次如彌勒の思想である。これは現生十益（教行信證）中の總益ともいふべきもので、教團人の最大關心事であつた。善鸞は神子巫女の主領といつても他の本尊をば用いず無礙光如來の名號を身からはなさず一心に念佛して

いたというから（幕歸繪詞）、彼の眞言修驗道に妥協したのは教線擴張のためであつたと考えられる。ところで如來等同の思想が一盆思想の傾向を有することは否めなく（河西氏、大谷學報二十ノ三）、事實同行間からも「眞言にかたよりたり」と不審されている（聖全二、六七五、六八一）から、この思想が眞言に相似して門下に映じていたことがわかる。さきに顯智がこの思想をすすめて密教的立場に近寄つたことをみた。彼が藥師寺を介して勸進している（三河念佛相承日記）ことからみると、次は民衆の教化に民間信仰的なものに留意していたようである。善鸞のかかる民間信仰に乘じての傳道に刺戟されて、門下の教學が眞言に相隣する如來等同の現益を中心にしたのではないか。この思想が善鸞事件を契機として大きく取上げられてきた資料的事實がこのことを示すようである。中世における彌勒信仰は盛行し殊に常陸、鹿島には彌勒の年號や踊歌さえある程で（橋川氏、日本佛教文化史の研究。柳田氏、心、復刊一。和歌森氏、史潮四八）この信仰の民間流傳を素地として便用彌勒如來等同の鼓吹は容易に民衆に歡迎され受け入れられたであらう（前記指南抄の執筆が善鸞事件の頃になされていることも考慮すべきだろう）。この意味で信心を生活に持ちこませ、信心歡喜者與諸如來等の思想を親鸞門下教學の中心たらしめた善鸞の教化仕方の影響は眞宗教學史上大きな意義をもつといえよう。そしてこの門下の教學は親鸞をして如來等同無義爲義から自然法爾へとおしすすめていたようである。この門下の教學は存覺の淨土眞要鈔に「わが流の極致」として顯著となり、これに對して歎異抄（一五）や口傳鈔、改邪鈔系列の方は消極的であり、再び信心の問題にかえつてゐること（杉紫朗氏、龍大論叢二四九參照）は興味深い。